様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６７４８

研究課題名（和文）インターナショナル・ウエスタンの起源と展開―フロンティア表象の世界的普及の研究

研究課題名（英文）The Origin and Development of International Westerns: A Study on the Global Diffusion of Frontier Imagery

研究代表者
川本　徹（KAWAMOTO, Tohru）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：１０７７２５２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：フロンティアのイメージはアメリカ文化の中核を担うものであるが、同時にそれは19世紀以降世界中に普及し、各地で独自の発展を遂げてきた。本研究は19世紀文学（ノンフィクションを含む）から21世紀映画まで多様なテクストを取り上げ、フロンティアのイメージが地域を越境するプロセスを探究した。その際、先行研究において軽視されてきた文学と映画の相互作用に重点を置いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
グローバル化が加速度的に進展する現在、ある国に固有と思われていた文化事象が、思わぬ形で国外に広がり、独自の展開を遂げる例が増えている。本研究は、その先駆的な事例と言えるインターナショナル・ウエスタンに着目し、それが国境を越えつつ姿を変えていくプロセスを具体的に跡づけた。このようにしてグローバル時代の文化変容を考察する一つのモデルを示した点に、本研究の学術的、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：While frontier imagery has been at the core of American culture, it has also been diffused globally and developed individually in each region since the 19th century. This research treated a range of texts, from 19th-century literature (including non-fiction writing) to 21st-century film, and explored the process in which frontier imagery crossed regional boundaries, with a special focus on the interaction of literature and film, which has been relatively neglected in the previous studies.

研究分野：映画学、アメリカ研究、アメリカ文学

キーワード：アメリカ西部　フロンティア　西部劇　インターナショナル・ウエスタン　グローバリゼーション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

フロンティアはアメリカを読み解く鍵と言うべき概念である。歴史学者フレデリック・ジャクソン・ターナーは、1893 年に発表された著名な論文のなかで、アメリカ西部のフロンティアを「未開と文明の接触点」と定義し、個人主義、民主主義、ナショナリズムなど、アメリカの国民性はすべてフロンティアで生まれたと主張した。フロンティアはアメリカがアメリカたる証である。ターナー論文はその後、仮説の妥当性をめぐり多くの批判を受けた。しかし、21 世紀に入ってなお、フロンティアないしアメリカ西部は、アメリカ国民のなかで特別な地位を占めている。このことは、カウボーイのイメージで売り出したＧ・Ｗ・ブッシュ大統領のみならず、ブッシュとは一見対照的なオバマ大統領までもが、演説のなかにフロンティアへの言及を組み込んでいることからも明らかである。

そのフロンティアのイメージを広めるのに貢献したのが、西部劇映画（ウエスタン）である。20 世紀以降、アメリカでは実に 7000 本以上もの西部劇が製作されてきた。本研究者は 2014 年に上梓した『荒野のオデュッセイア　西部劇映画論』（みすず書房）において、19 世紀の文学や美術にも言及しつつ、アメリカ映画におけるフロンティアのイメージの展開を丹念に追った。その次なる構想が、アメリカ国外で製作された西部劇（インターナショナル・ウエスタン）を視野に入れた、比較文化史的な観点からのフロンティア表象の研究である。

一般に、西部劇はアメリカ固有の映画ジャンルと考えられている。しかし実際には、西部劇は世界中で製作されてきた。西部劇はどこの国でも興業的価値が高かったために、アメリカの作品を輸入するだけでなく、各国で自前の西部劇を作る動きが生まれたのである。有名な例は、スパゲッティ・ウエスタン（日本ではマカロニ・ウエスタンと呼ばれる）であろう。1960 年代から 70 年代にイタリアで大量生産された西部劇である。スパゲッティ・ウエスタンの存在は当時から世界的に知られていたが、同時代に実はイタリアのみならず、ドイツやフランスでも西部劇が製作されたことに、近年注目が集まっている。さらにはヨーロッパのみならず、ここ日本でも西部劇風の作品が製作されたことは、銘記に値しよう。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀から現在までを視野に入れて、アメリカ西部のイメージが世界に流布したプロセスを明らかにすることである。西部劇映画が誕生する 20 世紀以前から、すでにアメリカの大衆文化（小説や演劇）ではフロンティアの主題が多大な人気を集めていた。さらに、そうしたフロンティアを主題とする小説や演劇は、ヨーロッパでも広く愛好されていた。20 世紀の後半以後、アメリカ以外の国で西部劇の製作ブームが起こるが、これは突発的な現象ではなく、19 世紀以来のフロンティアへの関心に根差した現象である。海外の研究書を繙読すると、19 世紀文学・演劇と 20 世紀映画のいずれか一方だけに注目したものが多いが、本研究はこの両方を視野に入れて、より包括的なフロンティア表象の研究を行うことにした。

３．研究の方法

以下に述べる諸点を具体的な課題に設定し、一次資料・二次資料の分析を中心に、順次リサーチを進めた。(1) ジェイムズ・フェニモア・クーパーの「レザーストッキング物語」の名声がアメリカを超えてヨーロッパ諸国に波及していくプロセスを分析する。(2) クーパーの影響のもと、アメリカ西部を舞台とする冒険小説をものしたヨーロッパ作家に注目し、クーパーの描いたフロンティアのイメージがいかに継承され、変奏されたのかを考察する。(3) インターナショナル・ウエスタンの製作が本格化する 1960 年代以前にアメリカ国外で製作された西部劇の実態を分析する。(4) アメリカ西部が舞台であるにも関わらず、アメリカ以外の国で撮影された映画を取り上げ、その文化史的、映画史的背景を探究する。(5) アメリカ西部のイメージが文学から映画へと移植された際に生じた変容について、具体的作品の分析を通して解明する。(6) アメリカ国外で製作された西部劇が近年のアメリカの西部劇にもたらした逆影響を調査する。

４．研究成果

(1) 『マーク・トウェイン 研究と批評』に寄稿した映画評『*Tom Sawyer & Huckleberry Finn.* Dir. Jo Kastner. cine-partners, 2014.』では、ジョー・カストナー監督の『トム・ソーヤー＆ハックルベリー・フィン』（原題 *Tom Sawyer & Huckleberry Finn*）を取り上げ、ロケ地がアメリカではない点などに注目しつつ、作品のポイントをまとめた。本作ではトウェインの原作『トム・ソーヤーの冒険』以上にミシシッピ川の存在が際立っている。しかし本作で描かれるミシシッピ川はアメリカのミシシッピ川ではなく、ブルガリアの川で撮影されたものである。アメリカの映画やテレビの世界では、アメリカを舞台とする作品を国外で撮影することは珍しいことではない。2000 年代以降は労賃の安い東ヨーロッパが撮影地として選ばれる例が増えている。南北戦争下のノースカロライナやヴァージニアを描く 2003 年の『コールド マウンテン』も主としてルーマニアで撮影された映画である。アメリカの風景、とりわけ国家のアイデンティティの根幹をなす西部の風景がヨーロッパで表象されてしまう現象は、さらに 20 世紀初頭のヨーロッパ製西部劇にまで遡ることも可能であり、トウェインの 19 世紀文学の最新映像化作品もまたこうしたインターナショナル・ウエスタンの系譜に位置づけられるものである。

(2) 『アメリカ文学と映画』に寄稿した論考「崖の上のアリス　『モヒカン族の最後』とその映画的表象」では、ジェイムズ・フェニモア・クーパーの長編小説『モヒカン族の最後』とその

映画化の歴史を論じた。19 世紀米文学を代表する小説『モヒカン族の最後』は今日でも確実に命脈を保っているが、それを可能にしたのは無数のアダプテーションである。実際、『モヒカン族の最後』のアダプテーションだけを論じた研究書すら存在する。映画はその中心であり、1909 年に短編映画が作られたのを皮切りに、『モヒカン族の最後』はアメリカ国内外で何度も映画化されてきた。本論考では『モヒカン族の最後』の映画化のポイントとして、しばしば原作には存在しないヒロインの落下が描かれることを取り上げ、その理由と描写の変遷の歴史について考察した。その際に明らかになったのは、『モヒカン族の最後』の映画版がクーパーの原作のみならず、『國民の創生』や『キングコング』等の各時代のアメリカ映画と間テクスト性を築いてきたということ、またそのプロセスで原作中の人種混淆の要素が希薄化されていったということである。本論考ではさらにマイケル・マン監督の 1992 年の『ラスト・オブ・モヒカン』で白人のヒロインと先住民の悪漢が崖の上で対峙する場面に着目し、この二人のショット／切り返しショットの西部劇の歴史における特異性について考察した。

(3) 『思想』の「危機の文学」特集号に寄稿した論考「日記・ボンネット・西部劇　映画と文学のアダプテーション論の余白に」では、ケリー・ライカート（日本ではライヒャルトと表記されることが多い）監督の 2010 年の西部劇『ミークス・カットオフ』を取り上げ、本作のアダプテーションとしての画期性について論じた。アダプテーションと言えばすぐに思い浮かぶのは文芸小説の映画版であろうし、研究でもそうしたものが中心を占めてきた歴史がある。『ミークス・カットオフ』はノンフィクション、より具体的に言えば史料（歴史書と日記）のアダプテーションである。とりわけ 19 世紀の女性開拓者の日記が翻案元テクストとして利用されているのが重要である。本作の特異な映像・音響設計――たとえば全編が昔ながらのアカデミー比で撮影されていること――はすべてこの点に由来するものである。ライカートは 19 世紀の女性開拓者の日記のなかにありうべき一つの映画の形を見いだしたのだとも言える。なお、本論考は本研究者が司会と報告を務めたアメリカ学会第 52 回年次大会の部会「アダプテーションの功罪　『映画化』を超える批評性を求めて」の成果の一部を文章化したものである。

(4) 『ユリイカ』のクエンティン・タランティーノ特集号に寄稿した論考「タランティーノの西部劇映画開拓史　『ジャンゴ 繋がれざる者』と『ヘイトフル・エイト』」では、タランティーノ西部劇に潜むインターナショナル・ウエスタンの文脈を浮き彫りにした。タランティーノはスパゲッティ・ウエスタンの愛好者として知られるが、自身の監督した西部劇においては、このイタリア製西部劇のアクション的特徴を引き継ぎながら、そこに欠落していたアメリカ史（とりわけ南部と黒人奴隷制をめぐる問題）を前景化している。またさらに重要なのは、イタリア製西部劇に先んじて成功を遂げたドイツ製西部劇の要素を取り入れている点である。それはドイツの国民作家カール・マイの西部小説に基づく一連の映画シリーズである。マイの西部小説ではドイツ人のオールド・シャターハンドと米先住民のヴィネトゥが友情を結ぶが、これが『ジャンゴ 繋がれざる者』のドイツ人のシュルツと黒人のジャンゴの基になっている。マイが西部小説を執筆する際に参考にしたのは、ジェイムズ・フェニモア・クーパーの「レザーストッキング物語」五部作であり、そこではナッティ・バンポーと米先住民のチンガチグックが友情を結ぶ。つまりクーパーの小説のアメリカ人と先住民のコンビが、ドイツ人作家の手でドイツ人と米先住民のコンビに変わり、それがさらにタランティーノの手でドイツ人と黒人のコンビに変わったのである。この関連でさらに指摘するなら、『ジャンゴ 繋がれざる者』には『ニーベルンゲンの歌』への言及があることから、このドイツ叙事詩との照応関係を分析する論考も多い。西部劇は神話を持っていなかったアメリカが独自に築いた神話だと言えるが、タランティーノは奴隷制を主題とする西部劇でドイツ神話に言及しつつ西部劇というアメリカ神話を批評したのである。

(5) 日本アメリカ文学会中部支部で行った口頭発表「*The Sisters Brothers* の映画版をめぐって ジャンル論的考察」では、フランス人監督ジャック・オーディアールの手になる異色の西部劇『ゴールデン・リバー』（原題 *The Sisters Brothers*）を取り上げ、原作であるカナダ人作家パトリック・デウィットの同名小説との比較を交えつつ、ジャンル論やアダプテーション論の視座から本作の新奇性を論じた。原作との相違点として注目に値するのは、映画においてウォームというキャラクターが語るある夢である。すなわち金採掘によって得た財産を足がかりに、無欲な共同体を築きたいとウォームが語るのである。これは映画独自のエピソードである。ウォームはその共同体をテキサスのダラスに作ると述べる。アメリカでもあまり知られていない事実であるが、19 世紀中葉、実際にダラスに実験的共同体が存在した。その名はラ・レユニオンであり、1855 年にフランス人のヴィクトル・プロスペール・コンシデランが設立したフーリエ主義の共同体である。フランス人監督による西部劇にこうした米仏交流史の要素が組み込まれている。一方で、原作と映画はいずれも主人公たちの東西の移動ではなく、南北の移動を描く物語となっているが、ここにはカナダ人作家デウィット自身の米加越境とその後の米国内での移住経験、さらにはオレゴンとカリフォルニアをめぐる 19 世紀文化史が複雑に折り重なっている。

以上が本研究の主たる成果である。『ユリイカ』に発表した(4)のタランティーノ西部劇論は本研究のアプローチを一般読者に向けても分かりやすく示したものと言える。また、本研究においては元々、19 世紀文学・演劇と 20 世紀映画の両方を視野に入れることをめざしていたが、学会でのアダプテーションをめぐる討論の場を経て、メディアの越境についてより理論的に考察する必要性を痛感した。そこで『思想』の文学特集号に寄稿したのが、19 世紀文学（日記）の映画化を扱った(3)の論考である。文学と映画を理論と歴史の両面でより自由に横断することは本研究者の今後の大きな目標であり、次の科研費（若手研究）の研究課題「〈驚異〉のアメリカ視

覚文化史の再構築　文学から映画へのメディア横断的探究」でそれに取り組む予定である。また、今回の研究課題に関しても、オーストラリアの西部小説・西部劇に関する研究を始め、まだ論文化が実現していないものも一部だが残っている。今後なるべく早い時期に発表するよう努めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>川本徹 | ４．巻<br>2019年9月号 |
| ２．論文標題<br>タランティーノの西部劇映画開拓史　『ジャンゴ 繋がれざる者』と『ヘイトフル・エイト』 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>ユリイカ | ６．最初と最後の頁<br>130-137 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>川本徹 | ４．巻<br>2019年11月号 |
| ２．論文標題<br>日記・ボンネット・西部劇　映画と文学のアダプテーション論の余白に | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>思想 | ６．最初と最後の頁<br>177-182 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>川本徹 | ４．巻<br>16 |
| ２．論文標題<br>映画評：Tom Sawyer & Huckleberry Finn. Dir. Jo Kastner. cine-partners, 2014. | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>マーク・トウェイン　研究と批評 | ６．最初と最後の頁<br>117-119 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>川本徹 |
| ２．発表標題<br>The Sisters Brothersの映画版をめぐって　ジャンル論的考察 |
| ３．学会等名<br>日本アメリカ文学会中部支部2月例会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>川本徹 |
| ２．発表標題<br>ボンネットを被った西部劇　女性開拓者の日記と『ミークス・カットオフ』 |
| ３．学会等名<br>アメリカ学会第52回年次大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>川本徹 |
| ２．発表標題<br>誰が崖から落ちるのか？　The Last of the Mohicansの映画版をめぐって |
| ３．学会等名<br>日本アメリカ文学会中部支部 |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>巽孝之、宇沢美子他 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>ミネルヴァ書房 | ５．総ページ数<br>244（担当ページ130-131，152） |
| ３．書名<br>よくわかるアメリカ文化史 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>杉野健太郎責任編集 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>三修社 | ５．総ページ数<br>360（担当ページ12-27、296-297） |
| ３．書名<br>アメリカ文学と映画 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| ○講演<br>川本徹「懐かしの西部劇映画をもう一度①～③」朝日カルチャーセンター名古屋教室 2017年10月13日、20日、27日。<br>川本徹「映画『荒野の七人』を読む」朝日カルチャーセンター名古屋教室、2016年10月12日。<br>川本徹「時計じかけの保安官　西部劇映画における時間の主題」名古屋市立大学人間文化研究所サイエンスカフェ、2016年6月25日。<br><br>○報告<br>川本徹「アメリカ学会第52回年次大会報告（部会Ｃ：アダプテーションの功罪 「映画化」を超える批評性を求めて）」、『アメリカ研究』第53号、2019年4月、229-230。 |

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|